

反照に浮かぶ「東洋」——戦後の少年少女向け翻訳叢書における位置と範囲——

佐藤 宗子

千葉大学・教育学部

Reflected Self-Image: The Representation of the East in Translated Literature for Children in Post-War Japan

SATO Motoko

Faculty of Education, Chiba University, Japan

一九五〇年代に創元社と講談社からそれぞれ刊行された二つの「地域割り」叢書について、これまで進めてきた「西洋」諸地域の翻訳作品の少年少女読者に対する提示のあり方を念頭に置いた上で、「東洋編」の諸巻の検討を行った。先行する数種の叢書類の巻構成や最近の「東洋学」関係の論考を踏まえた上で、創元社版の「東洋編」が編者側のきわめて意欲的な構想のもとに成立していること、反面、「西洋」における当時の学術成果のもとに一元的な文化程度の判断基準が存すること、「中国」の比重が後半に高まることを指摘し、また講談社版では、創元社版と差異化が図られつつも収録作品等で共通性が見られること、創元社版と共通する編者側の意識があることを確認した。両者の検討を通して、当時の児童文学関係者たちにとって、「日本」が「西洋」を経由したまなざしの下に、「東洋」の内でもあり外でもあるという二重性を持って自己認識されていたことが露呈した。

キーワード：児童文学 (Children's literature) 翻訳 (translation) 少年少女 (boys and girls) 東洋 (the East)

一

第二次世界大戦後の少年少女向け翻訳叢書が果たした「教養」形成の役割については、とくに一九五〇年代から六〇年代にかけて刊行された創元社、講談社の二つのいわば「地域割り」叢書と、岩波書店刊行の全集を対象にして、その内実を追求してきた。(詳しくは『千葉大学教育学部研究紀要』第五七巻～五九巻所収の小論を参照されたい。)その際、主として検討の対象にしてきたのは、基本的に「西洋」の文学との関連であった。

一方で、前二者の「地域割り」のあり方が、そうした「西洋」諸地域およびそれに準ずるロシアなどと区分されるかたちで、「東洋編」「日本編」と基本的に三分割されたかたちである点に、目を向けてみる必要があると考える。(時代的に先立つ

「古代」「中世」、および創元社版のジャンル別の巻を除く。)日本もその一角に存するわけではあるが、自国を除いた「東洋」という括り方は、いったいどのようななされているのだろうか。「東洋編」の巻の構成、対象とされた地域、収録された作品群を検討するなかから、そこどのような「東洋」認識が窺えるのか、また読者である少年少女にはそれらの巻の「読書」を通して何が徳憑されたのかを、追究していくことにしたい。

具体的な検討にあたっては、創元社版の叢書の月報も参照しながら、創元社「世界少年少女文学全集」と講談社「少年少女世界文学全集」を順次対象にしていくが、参考として後で岩波書店の「岩波少年少女文学全集」にも言及する。なお、本文中では説明が煩瑣になるため、後ろに資料として四点の表を掲げた。創元社と講談社の全体の巻構成、それぞれの東洋編収録作品一覧、さらに関連する作品対照表を、

古典関係と近現代の作品に分けて示した。適宜参照されたい。

まずは、前二者の「地域割り」叢書の検討に先立って、先行するいくつかの叢書類における巻構成に触れるとともに、「東洋」という括り方について、「東洋学」の研究書を参照するところから始めることとする。

二

第二次大戦までに刊行された児童文学関連の翻訳を含む主要な叢書では、巻構成において、世界の諸地域に対するどのような認識が認められるのだろうか。

明治期の巖谷小波「世界お伽噺」は、たしかに世界各地の作品が収録されているものの、むしろ作品優位の構成とみなしてよいだろう。大正期の「模範家庭文庫」も作品優位と比べてよいが、「童話宝玉集」というアンソロジーとして「日本」―「世界」を対比させているほか、「アジア地域では、それぞれ「支那」「朝鮮」「印度」を冠した「童話集」を刊行している。

戦前の先行する「地域割り」叢書といってもよいのは一九二四年から刊行された「世界童話大系」である。第一巻が「希臘・羅馬・伊太利篇」とあるように、各巻には地域名が採用されている。アジア関係は、「印度篇」、「土耳其・波斯篇」、「亜刺比亞篇」三巻、「支那・台湾篇」、そして日本は「日本童話集」と、全二三巻にしては占有率が高く見える。しかし叢書各巻の中身をみると、実は作品優位の要素も強い。「亜刺比亞篇」が三巻もあるのは、日夏耿之介によるレイン版の『アラビヤン・ナイト』全訳を収録したためである。同叢書ではほかにも、アフナーシエフやクルイロフの童話集を収録した「露西亜篇」も二巻あるなど、やはり特定の作家や作品の収録を優先させたとみるほうがよいだろう。

昭和初年の二大叢書、「小学生全集」と「日本児童文庫」の場合は、どうか。もちろん、この二叢書は翻訳文学主体の叢書ではない。しかし、翻訳作品も相当数収録されているほか、知識読物も含めたアンソロジーも多い。その編集の仕方をみてみると、単発の翻訳文学作品収録のかたちももちろん見られるが、「日本」と「世界」を対比させたものなども散見される。

「小学生全集」の場合は、「童話集」が「日本」2―「世界」2、「文芸童話集」が「日本」3―「外国」2、「偉人伝」が「日本」2―「世界」1といった具合である。（算用数字は、巻数を示す。）全八八巻のなかでは、さほど目立つ割合ではな

い。なお「文芸童話集」における「外国」の中身は、西洋およびロシアである。

それに対して「日本児童文庫」の場合は、対比させた巻構成がより明確である。まず、「歴史物語」が「日本」3―「西洋」3―「東洋」1である。また、「日本」―「世界」を対照させた巻が、知識読物等も含めると「神話伝説集」、「童話集」（各3）、「勇者物語」、「立志物語」、「の名画」、「の旅」と続く。ほかに、「日本お伽噺集」（小波の作品）、「日本昔話集」2（柳田國男と、アイヌ篇・朝鮮篇・琉球篇・台湾篇）、「支那童話集」、「印度童話集」、そして「西洋少年少女小説集」「西洋冒険小説集」もある。概していえば、「世界」というときには西洋やロシアを指しており、アジア地域は別と考えられているようである。

注目すべきは、ここで「東洋」を冠する巻が登場している点である。また、それが「歴史物語」である点は、実は必然的といってもよいことなのである。

ここで、「東洋」という語とその学術的な意識について、「東洋学」の最近の文献を参照し、簡単にまとめておくこととする。岩波講座「帝国」日本の学知「第三巻『東洋学の磁場』」（岩波書店、二〇〇六）の「第一章 日本の『東洋学』の形成と構図」（中見立夫）、「第二章 東洋史学の形成と中国―桑原隲蔵の場合」（吉澤誠一郎）によれば、ヨーロッパにおける人文科学、すなわち「史学・文学・哲学」を中心とする学問はヨーロッパ文明のみを対象にしており、それ以外の地域については言語文化別にフィロロジを中心し、あえて上記の区分をすることなく行われていた、それがヨーロッパの「東洋学」であった、という。一方、ヨーロッパからフィロロジが、さらに歴史学が伝わる中で、日本でも「国語・国文学」、「国史学」が成立するなかで、それまでの「和漢学」は消滅、また分解していき、そうした情勢を受け、中等学校の歴史教育の中で「国史・東洋史・西洋史」という三分割法が登場する。（科目名となったのは一八九四年。）そうしてでてきた「東洋史」は初期の段階で、中国史の相対化が特徴であり、また東洋史学では隠された主題としてアジアにおける日本の位置付けがあった、というわけである。

「日本児童文庫」において「東洋」が冠されるのが「歴史物語」であることは、こうした経緯からすれば、自然なことといえてよい。しかしまた、「日本」、「西洋」の巻が各三巻あるのに対して、「東洋」が一卷のみということからは、これらの地域が対等に登場しているわけではないことも窺い知れる。「日本」と対照させた「世界」には入らず、伝承文学を主眼とすれば「印度」や「支那」、そして「亜刺比亞」

は時に浮上するものの、「日本」―「西洋」―「東洋」の三分割では三つ巴になれぬ程度の割合である、「東洋」。第二次大戦を経た、戦後の世界の情勢を受けて、それはどのような変貌を遂げて、翻訳叢書の中に姿を現してくるのか。次節では、まず創元社の叢書を対象にしてみる。

三

(一)

創元社「世界少年少女文学全集」は、第一期が全三三巻、第二期が全一八巻、そして第二期が全一八巻から成る。このうち「東洋編」はそれぞれ、三、二、一巻を占める。(なお、ジャンル別の巻が第一期に二巻、第二期に五巻、第二期になって五巻ある。)全体の一割程度というのは、西洋の一つの地域と同列の扱いということになる。

創元社の全集は、附録として「世界少年少女文学全集ニュース」という名称の月報がついている。「東洋編」の最初の巻にあたる、第二五巻(東洋編(1))に付けられた同「ニュース」二二号の一面には、「光あれ! アジア」という無署名の文章が掲載されている。「アジア! 東洋! それは、ヨーロッパやアメリカにくらべると、もちろんはるかにしたしくなつかしいひびきがします。なんといつてもわれわれの国日本も、アジアの一角にあるからです。」と、きわめて強い共感の念の表明から始まる文章は、長い間「ヨーロッパやアメリカの国々」によって苦しい時を過ごしていたアジアの国々が戦後になって独立したことを「民族の強い意志のあらわれ」として評価する。また、かつて「仏教によって」結ばれたアジアの国同士が、今後手を取り合い、平和を守る勢力となるべきことがわれわれのつとめであるはずなのに、現実には新中国との不仲やフィリピンとの間の賠償問題があることを「ふしぎな、おろかなこと」と嘆く。そして、「東洋よ、ともに手をたずさえて行こう! と、叫びたいと思います。そしてそれこそ、少年少女のみなさんのこれからの力しだいです。」と高らかに呼びかけて終わる。

日本がアジア地域においてどのような戦争をしたのかを現在から振り返るなら、この呼びかけは、一九五四年六月の刊行時点で発せられることばとしては、日本の戦争責任に全く眼をつぶったものとして批判せざるを得ないだろう。ただ、それをいったん措いたところで、編者側の趣旨を探ってみることにしたい。

まず、「東洋」の範囲を、広く視野に入れようとする意識が働いている。それは、「東洋編(1)」の「解説」に差し挟まれた見開きの地図からも見て取れる。東は太平洋上の日本、フィリピン、西はトルコ、南はインドネシアまでを一枚の地図に収め、かつ小さい付図でミクロネシア、ポリネシア、メラネシアの南洋諸島も示す。きわめて広い領域を、「東洋」として読者に印象付けようとしているのである。

実際、この巻収録の作品は実に多様な地域のものを含んでいるが、それはむしろ、そうした広範な領域を覆うことは、伝承文学ゆえにできた／＼にしかできなかったことだ、といったほうがよからう。第一期の続く巻は、(2)が中国古典、(3)が『アラビアン・ナイト』と、アジアの東と西の著名な古典を取り上げている。そして第二期以降、若干の朝鮮近代の短編を含むものの、収録作品は大きく中国に傾く。

つまり、創元社版の編者の意図を推測するならば、以下のように言えるのではないか――巻数が限られている中で、まず読者に手渡すべきは、(アジア)という概念で広く括られる地域がある、という認識である、そしてその実現には、伝承文学の収録が最適である、と。これは、「東洋編(1)」附録の「ニュース」二二号の「編集室だより」に、「二十一回配本『東洋童話集』をおとどけます。東洋諸国のお話を一冊にまとめた、こういう本はいままでにないと自負しています。」と端的に書かれていることから明らかであろう。

しかし、その「自負」ということばの誇らしさと相反するように、「解説」の文章はあちこちで、その裏に潜む編者側の「東洋」に対するまなざしのあり方を露呈している。

もともと顕著なのは、前半の松村武雄による全体的な概括の部分である。松村はそこで、この巻の特徴を三点あげている。各国の風俗、信仰、習慣の違いの「変化、多様をさぐる」ことにより興味を引き起こされる、という第一点に続き、彼は、東洋諸国の人種は「文化民族」と「自然民族」の二つに分類される、との見方を示す。「古くかなり高い文化を持った民族」である前者には朝鮮、中国、インド、ペルシア、トルコが、「野蛮・未開で、今もやはり、かなり低い文化しか持っていない民族」としてシベリア、台湾、フィリピン、南洋が該当、また「アイヌ」は二つの中間であるといった位置づけを、ドイツの学者フィヤーカーントの名前を挙げつつ提示し、両者が科学的・自然法的・V S 神話的・呪法的とする対比をしながら、そのように収録された話がそれぞれ違っていること自体が、第二の特徴だということである。

それでいて、「わたしたちは、これらのお話を通じて、東洋の諸民族と、知らず知らずのうちになかよく一堂に会合し、親しく手をにぎりあつてゐる」、読んでいって思いがけないところに「日本のお話とばかり考えていたもの」を見つけると「なつかしさ、親しさ」を感じられるだろう、それがこの巻の第三の特徴だとも述べる。松村自身は科学的、学術的と考える、「良心的」で「真摯」な読書へのいざないは、「東洋」を知らせると同時に、読者に自然とその中の序列を刷り込むことを含んでいることは明らかだろう。その時、判断する主体は日本は、「東洋」の外側に位置していたこともまた、当然ということになる。

個別作品の解説の個所でも、松村の上記の立場は維持され続けるが、同時に明らかになるのは、彼はそれらの諸地域の伝承文学の紹介を、もっぱら西洋の書物に依拠して行っている、という事実である。担当した四つの地域について、たとえば南洋諸島についてはターナー、ベチエメル、デイクソン、インドについてはペンファイヤフランシス、フリッチュ、ベルシアについてはオルコット、トルコについてはクノスの本から適宜の作品を採ってきたことを、明示している。つまり彼は、「西洋」のまなざしにすつきり沿いながら「日本」からの「東洋」を眺め、それでいて同時に「日本」を「東洋」のなかとして実感もする、という二重の位置感覚を、先達として少年少女読者に手渡そうとしている、ということになる。

他の訳者たちの解説の中にも、類似の姿勢を認めることはできる。たとえば「蒙古童話集」の訳者、服部四郎は、「昭和十年に（略）ホロンバイル地方に（略）滞在していたとき、蒙古の子どもが話すのを書きとつたもの」を訳したというのだが、「ニュース」二一号掲載の服部の回想によれば、初め子どもたちはお話を知らないと言っていたため、服部が「外国の学者の集めた蒙古の童話」を声を出して読んでみた、面白いと言って集まった子どもたちの中で「そんな話を知っているよ」と話してくれた子どもを写真撮影した、そうするとみな撮ってもらいたくて「お話をするから、写真を」という子どもたちが次々と現れて、採集ができた……というのである。服部自身はそこに疑問を抱いていないようだが、あるいはそれらは、写真撮影目当てに、聞かされたばかりの西洋の学者収集話に即して「お話をしよう」と試みる子どもたちの、努力の産物であったかもしれないことになる。

「東洋編」という枠を設けたことは、創元社編者の、第二次大戦後という時代状況における企画として眼を向けるべき意味がある。それと同時に、「東洋」への

まなざしの向け方が孕んでいた問題を、現在の時点で捉え直す必要があるだろう。

(二)

「東洋編(2)」、「東洋編(3)」は、かたや「水滸伝」と「西遊記」、かたや「アラビアン・ナイト」と、東洋の両端における古典的な作品をそれぞれ収録したものである。ここで確認しておくべきは、創元社版には別に「古典編」「中世編」が存在している、ということだろう。

それについて簡潔に説明をしているのは、「東洋編(3)」の附録、「ニュース」二十七号の「次回配本のお知らせ」記事である。たまたま第二八回配本が第二巻の「中世編」なのであるが、それに関して、次のように説明している。すなわち、「ギリシア神話とキリスト教にあらわれている精神は、西欧のものと考え方を形づくっている大きな二つの流れ」で、第一巻「古典編」が「ギリシア神話を中心とする巻」だったため、今度は「聖書の話と密接に結びついている中世紀の騎士物語」をこの巻にまとめた、というのである。古典、中世の二つの巻でまず指し示すのは、やはり、「西洋」の基幹となる思想の源泉であり、初めからそこに東洋が入る余地はない、ということらしい。

もつとも、「アラビアン・ナイト」に関しては、附録の記事や訳出本文ともに、なかなか興味深い点が多い。佐藤正彰の訳は、毎夜の語りであることを明示する枠を一貫してとりいれるなど、少年少女向けの翻訳としては珍しい訳出になっている。附録の「ニュース」二七号掲載の春山行夫「アラビアン・ナイト雑話」は、ガラン版から語り起こし、マルドリウス版とバートン版が当時、一般向けとしては岩波文庫と角川文庫に収録されていたことに触れ、また「西洋で東洋（オリエント）」と呼んでいるのは「アラビアン・ナイト」的「な世界」であり、日本は「極東」と呼ばれていること、映画の「アラビアン・ナイト」は「西洋人の想像の中にある東洋が、どのようなイメージ（形象）や音楽で形成されているか」を知る点で興味深いと記すなど、的を射たエッセイである。

マルドリウス版から翻訳をした佐藤正彰は、「解説」の中で「東洋語から直截に訳されたものがない」ことを残念がっているが、ちなみに前嶋信次によるアラビア語からの翻訳の第一巻が平凡社東洋文庫に収録されるのは、一九六六年である。

中国の作品は、第一期の段階では「東洋編(2)」に「水滸伝」と「西遊記」が収録されたのみだった。その点で言うなら、第一期の三巻の割り振りは、まさに「東洋」

全体のバランスを見渡した上での選択だった。ただ、その後の第二期に至ると、残る収録候補作はやはり、中国の古典および近現代の作品、ということになる。その中で「東洋編(5)」で、〈現代中国童話集〉「二編」とならび、〈朝鮮童話集〉三編が収載されている点は、注意を向けるべきことだろう。「解説」で野口赫宙は、当時の政治的な分断を嘆き、「ここでは、南北をおしなべて朝鮮文学とよぶことにしましょう！」と述べたうえで、「文学としては植民地時代のほうがすぐれているようである」として、当時の作品を三編、ときに改題したり、「児童物になるよう多少あらためたり」したことを断る。新しい作品がたくさん出現している当時の中国とは比べるべくもない状況の中で、この三編の収録は、創元社版の英断だったとみなしてもいいだろう。ちなみに附録の「ニュース」四六号の「編集室から」では、「この集を手がかりにおとなりの国の文学をどんどん勉強してください。」と記されており、近隣の国であるからこそ、中国のみならず朝鮮文学も収録しようとした意図が伝わる。

〈現代中国童話集〉では、近代の作品と新中国成立後の作品の双方が取り上げられている。「ニュース」掲載の竹内好「もつと中国人の心を」や火野葦平「新中国の子どもたち」、巻末のそれぞれの訳者による解説からは、日本人が抱いていた偏見をなくすことや現代の中国をよく知ろうとすることの重要性、かつての中国の社会状況の中で人々が直面していた苦しみとその中で生まれた文学の価値、新中国成立後の新しい作品が醸し出すエネルギーやユーモア、一方で子どもたちが新たな類型にはめ込まれたのではとの懸念など、さまざまな中国に対する捉え方が提示されており、各訳者による温度差も見えて、興味深い。

なお、第二部の「東洋編」収録作品について触れると、この巻は〈中国新児童文学集〉と銘打たれ、すべてを倉石武四郎が翻訳している体裁となっている。おそらく、第二期の「東洋編(5)」で、当時代表的と考えられる作品はある程度拾い上げているため、それ以上どのように「東洋」の作品を選択すべきか、編集側としては困惑したのだろう。そこで、倉石にいわば「丸投げ」して、作品選択から翻訳まで一括して任せた、というところではないか。倉石がとった方法は、前年に巖文井が編集した大部のアンソロジーを中心に、ごく最近の作品(五三年から五五年)に絞る、小説、詩、童話、劇の四ジャンルにわけて紹介する、というものだった。また、翻訳に際しては「東京大学の学生諸君の援助を受けた」と巻末の「解説」に記されて

いる通り、一七人の学生たちに、下訳をさせたようである。そのなかには、石川忠久や竹田晃など、後の中国文学者の名が見られる。

そうしたおそらくは苦肉の策を取らざるを得ないのが「東洋編」編集の実態だった——とすると、そこには「西洋」の諸地域の作品を選定するのは全く異なる苦労があったはずだが、それが予想されつつも「東洋編」を「地域割り」のなかに組み入れたという点では、創元社版の獨創性は、きちんと評価しておくべきだろう。

四

(一)

講談社「少女少女世界文学全集」は、一九五八年の刊行当初から、全五〇巻として企画されたものだった。全体的な「地域割り」の発想が、創元社版に依拠している点は、言うまでもない。創元社版のようなジャンル別の巻は、第五〇巻の詩と童謡の巻のみであり、また時代区分の巻も「古代中世編」三巻のため、地域に割り当てられる巻数は、創元社版より若干多い。しかしその中で「東洋編」は、全部で四巻と、創元社版第一部五〇巻と比べ、一卷減らされている。内訳を見てみれば、一対三で、要するに「中国および近隣」三巻と、「それ以外」一巻、という構成である。一つには、創元社版との差別化を図る必要もあっただろうし、別の理由としては、講談社版では地域ごとに、巻末の「解説」のはじめに「〇〇の文学」といった簡略な文学史が掲載されていたという事情もある。一つの地域の文学史を、巻数に応じて古い時代から順次説明し、最後は児童文学の状況にも触れる、というのが通常のやり方であった。そのため、どうしても中国が占める割合が大きいとすれば、上記のような分け方が妥当なものだったということになる。

具体的に言うと、「東洋編1」では、「アラビアン・ナイト」とペルシア、トルコ、インドの古典を中心にした作品群、ただし新しいところではインドのタゴールの作品を入れている。「東洋編2」は「西遊記」と中国に近い地域の民話、「東洋編3」は代表的な古典、「東洋編4」が近現代の作品となる。

創元社版との関連で眼を向けたのは、「東洋編1」「東洋編2」に収載された民話に対する「解説」等の内容である。

「東洋編1」の総論解説者、山室静は、対象となる「中国をのぞくアジア地域の文学のぜんたい」を扱うことは、「むずかしいというより、ほとんどできないよう

なこと」と率直に述べる。そのため、アジア地域の特徴として、広く、ヨーロッパと比較して統一された文化を持たないこと、どこからどこまでか境界がはっきりしないことの二点を挙げた上で、近東(メソポタミア、ヘブライ)、インド、中国、そしてペルシア・アラビア・トルコなどの四つのグループを紹介するといった具合で、総花的といっているような概観を示すにとどまる。

それに対し、「東洋編2」の総論解説者、伊藤貴磨は、そもそも「地下水としての存在」だった民話が、戦後になって浮上した背景をまず語る。中国における「少年のよみものの欠乏」が、「民話を動員した感があり」、また「辺境まで政治と文化がおしひろめられた」ことで「少数民族の民話も、どしどし採集された」というのである。さらに伊藤は、近隣の地域についても言及する。たとえば、朝鮮の民話は中国に比して「小つぶながら、むじゃきでこっけい」、台湾の以前の原住民、いわゆる「生蕃」の民話は「ごく単純でそぼく」だが、台湾民族のものは「なかなか複雑なもの」がある、ベトナムは中国文化をよく吸収しているので民話もすぐれている、カンボジア、ラオス、タイもそれぞれの民族の空想を反映させているが、ただビルマだけは山国で、「交通もすくなかったので、民話もいくらか単純」、といった按配である。

伊藤の評価のしかたは、創元社版の松村武雄の判断のしかたを容易に想起させる。考えてみれば、山室の評価が総花的であったのも、たまたま彼が担当したのが松村のいう「文化民族」の地域だったことを思い合わせれば、やはり同様の基準の上に立っていたことも想像される。

山室の評価でもう一つ、注目すべき点を付け加えておこう。タゴール礼賛についてである。「東洋編」の中では中国の作品を除くと、彼の作品だけが、近現代から選択されている。その理由は、タゴールが当時東洋人としては唯一、ノーベル文学賞を受賞した「東洋の詩聖」だから、である。また、彼は「東洋の伝統の上にたちながら、西洋的な思想もとり入れ、しかも美しい調和をしめしている」、さらに「日本を心から愛して三度も来遊」しつつ、日本の軍国主義台頭や中国侵入を批判するなど、「徹底的な愛と平和の使徒」だった、ともいう。

民話全般やタゴールに対する評価からは、「西洋」の文学的基準を前提としながら、戦後日本から見た「東洋」のすがたが見えてくるように思える。

「東洋編3」で「水滸伝」、「三国志」、「聊齋志異」などの代表的な中国のいわば

「国民文学」を掲載した後、「東洋編4」では、いよいよ近現代の作品紹介となる。後掲の資料を見ればわかる通り、収録作品や作家は、創元社版とかなり共通するものの、配列はむしろ新しい作品を先立て、近代の作品を後においている。配列順の相違はやはり、創元社版を強く意識した結果だろうが、収録作品・作家の共通性が多いことに、当時の日本における中国文学研究の状況が透けて見えるように感じる。研究者が他のアジア地域より多いとはいえ、英語圏やフランス、ドイツに比べれば人材は限られ、また少年少女向けを考慮すれば、近代の一般文学にせよ、戦後の児童文学にせよ、評価し紹介できる作品は自ずと絞られてくる。

それらの状況を、「東洋編4」の総論解説者、伊藤貴磨はどのように語っているだろうか。伊藤は、一九一〇年代後半の文学革命を説明し、文学運動と政治運動の関連性にも言及し、「共産中国」の「みなもと」が四十年前にあったことを指摘する。そして戦後、新中国成立前の北京占領後直ちに少年児童向けの雑誌を発行したことを受け、「新中国の指導者の、きびきびしたやりかた」に大変感心した、と高く評価している。また、中国の児童文学に関しては、「以前から自身が主張していた通り、日本とは異なって短編よりも長編にすぐれていることが、「やつぱりあったっていました」と誇らしげに語られ、収録されなかった作品にも言及しながら「中国の長編童話の前途は、まさに洋々たるものがあります」とも述べる。さらに、個別の作品解説の箇所では、「松子(スンツー)」に関して、作中人物を突き放した作者の手法について、日本の少年少女が「あまやかすような童話でそだてられてきた」と対比させ、たまにはこうした「きびしい作」に接するのによい、との見方を示す。この巻刊行はすでに日本で「現代児童文学」が発売した後の六二年であるが、遅まきの「童話伝統批判」ということになるだろうか。

他の解説者たちの文章の中には、たとえば君島久子のように「しつぽをふるおおかみ」の寓意性と関連して「現代の中国のすがた」に触れたものもあるが、概して言えば伊藤ほどの手放しでの中国作品礼賛ではないものの、個人の、また社会全体の「成長」や「変革」をめざす方向性を肯定的に紹介する言葉が多く見られる。それらは、当時の中国文学研究や一般向けの作品紹介などが抱えていた熱気を反映させたものとみなしてよからう。ちなみに一九五四年から五八年にかけては、河出書房から「現代中国文学全集」全一五巻が刊行されている。文化大革命開始の数年前の、ある意味では幸福な中国児童文学紹介の時期であったといえるのかもしれない。

(一)

講談社版には、創元社版にはない「読書指導」ページが、「解説」の後ろに付されている。各巻の担当者名はすべて滑川道夫ともう一人の連名だが、滑川以外のほうが実際には担当したと考えてよいだろう。順に名を記すと、沢辺寿一、加藤哲郎、今村秀夫、今村秀夫となる。全体的な傾向を挙げるなら、かつて小論「指導される」「教養」——二つの少女向け世界文学全集にみる「文学」の役割——（『千葉大学教育学部研究紀要』五八巻、二〇一〇）で「西洋」諸地域の「読書指導」のあり方を分析した中から浮かび上がるような、いわば「微に入り細を穿つ」類の技術的指導は影を潜めている。というより、端的に言えば、どこか及び腰なのである。以下、簡単に各巻の「読書指導」の要点を記してみる。

「東洋編1」の沢辺は、注目する登場人物を、「アラビアン・ナイト」のシンドバッドとアラジンに絞り込み、「じぶんが主人公になったつもりで」との小見出しを立てる。講談社版の訳者大場正史はバートン版に基づき、また創元社版とは異なり、本文では毎夜の語りという枠組みを外した。それだけに、読者にとって同作品は、男性主人公による複数の冒険譚、という態に見える。さらに小見出し「アラジンのランプがほしい」では、そうした内容の小学校五年男子の作文を紹介し、とにかく「じぶんの考えやきもちを見つけだす」ことが第一とする。その背景には、「アラビア」に関する知識の乏しさから来る不安があったのではないか。たとえば次の小見出しでは「アラビアはどこでしょう」を掲げ、アラビア海やアラビア砂漠、サウジアラビアなどを地図から見つけて示しているが、それ以上は踏み込もうとはしない。そして他の作品群に関しては、実践例として、皆に知られていないインドの「ラーマーヤナ」の紹介文を書くことを勧めるにとどめる。

「東洋編2」の加藤は、「西遊記」に関してはすでに他のメディアで同作を知る読者も多いことを想定してか、とにかくマンガを軽いものとし、「おやつ」に比する。仮にマンガが面白いとしてもそれは原作の力あってこそで、原作を生かした読物はマンガとは違った面白さがあり、「ほんとうにみなさんが食べなければならぬもの」がある、と断言する。そして本作の読書の主眼は、作品を通しての登場人物のさまざまな変化を読み取ることに置く。諸地域の民話に関しては、中国と台湾のものに若干触れる程度に過ぎない。

「東洋編3」「東洋編4」の今村は、前者では「水滸伝」と「三国志」を対比させ

た中学一年生の読書会を紹介する形式をとり、「琴の音のちぎり」を多少紹介するのみで、「聊齋志異」には触れようとしない。そして、まずは中国の人びとに親しみをもつことを勧め、そこから現在の作品にも手を伸ばすようにと全体的な姿勢を説くのみである。後者では、多くの収録作品のうち、「たからのひょうたん」と「小つばめの大飛行」の長編二編と、「故郷」「長生塔」の短編二編を取り上げ、とくに長編二作品を中心に主人公に即した読み進め方の指導をするが、全体的に見れば古い中国と新しい中国を対比しつつ紹介する感が強い。

「東洋編」四巻全体の指導のしかたをまとめてみるなら、「主人公の冒険」には言及できても、それ以上深く掘り下げていくことは避けていること、「東洋」というイメージは誰にとっても持ちづらいらしいことがわかる。他方「中国」というイメージは結ぶことができ、とくに新中国における個人と社会のいわば前向きな姿は積極的に少年少女にも指し示しうると捉えられているように思う。反面、多様な収録作品には触れられないままなのである。もちろん「西洋」諸地域の巻においてもすべての作品が「読書指導」で取り上げられていたわけではないにせよ、あの創元社版が附録の「ニュース」巻頭で篤く語った「東洋」への思いを、子ども読者に近い立場であるはずの講談社版読書指導者たちのことばから感じることはない。その意味では、「東洋」の作品——伝承文学から古典、近現代の作品に至るまで——は、教師たちにとって、「読書指導」にふさわしいテキストではなかったのかもしれない。

五

(一)

二つの「地域割り」叢書における「東洋編」の内実をみてきたが、ここで「岩波少年少女文学全集」についても覗いておくことにしよう。すでに小論「精選と洗練の産物——「教養」追求からみた「岩波少年少女文学全集」——」（『千葉大学教育学部研究紀要』五九巻、二〇一一）で指摘したように、全三〇巻の同叢書はノンフィクションや伝記の占める比率が高く、また基本的に長編を収録している。そのため、「東洋」の作品収録の巻は、中国の現代児童文学から長編二編を収録し一九六二年に刊行された第一九巻のみである。

収録作品は、すでに二叢書にも収録されている「宝のひょうたん」と、他の短編が講談社版に収録されている、謝冰心の「陶奇の夏休み日記」。「訳者あとがき」で

は、「宝」の訳者松枝茂夫・君島久子は中国の人びとが「一致協力して新国家建設にいそしんでいる様子」がうかがえるとしながらも、同作の「諷刺的要素が多い」ことに触れ、「新中国の一部に見られる形式主義、教条主義、立身出世主義、個人的名誉欲、労働を嫌う怠惰な精神、等々」をユーモラスに批判した点にも言及する。また「陶奇」の訳者倉石武四郎は、同作が雑誌発表された早い時期から翻訳の意思を持っていたことを記し、作品への愛着をうかがわせるが、同時に、そもそも「中国の少年少女たちのために書かれたもの」であるため、日本の少年少女読者にとってわかりにくい点や「必ずしも適切でない」ところがあることを指摘し、該当箇所を削ったことを明らかにしている。中国の状況もなるべく客観的に捉え、また社会状況が異なることを翻訳に際して配慮しようとする姿勢も明確である。

それでもなお、現在性の強い日常的な作品は、古びるのも早い。「陶奇」は一九五〇年代の一少女の日記というスタイルであるだけに、まさにそれに該当した。一方、「宝」は、その後も他の叢書に収録されるなど、ファンタジーの要素を含むためむしろ息長く翻訳作品として受け継がれた。

叢書全体の中で何巻を占めるかは、その叢書の意図を端的に示す。「岩波少年少女文学全集」の場合、「東洋」は三〇分の一、そして「日本」も三〇分の一であるのだが、たとえば「少年少女世界文学全集」が刊行されていたちょうど同時期の一九六〇年から翌年にかけて、講談社からは別に、「少年少女世界伝記全集」全一五巻も刊行されていた。これは、文学の場合と同様の「地域割り」伝記叢書である。アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、北欧、南欧、ロシア、諸国、東洋、日本という見慣れた区分だが、目に付くのは巻の割り振りで、アメリカが三巻、日本が四巻、後はすべて各一巻である。一冊あたり大きめに三人を、付随して四人を取り上げるとするのが基本スタイルだが、つまり、六〇年代初めの日本の少年少女に知らしめたい「偉人」は、アメリカと日本に存する、ということを実に示している。

その後、講談社版の後に「地域割り」翻訳叢書を三種刊行している小学館の場合を見やっておくと、六四年からの「少年少女世界の名作文学」では三／五〇巻、六八年からの「少年少女世界の文学 カラー版」では二／三〇巻、七一年からの「少年少女世界の名作」では二／五五巻と、確実に「東洋」の占める率は低下していく。逆にみるなら、創元社版、講談社版の企画・刊行の時期は、戦後の時代状況の中で、「東洋」という語が放つ新鮮な魅力があり、また隣国である中国の文学状況が

沸き立つように伝わってきたということになるだろう。

(二)

創元社版と講談社版の二つの叢書における「東洋編」の収録状況を概観しながら常を感じられるのは、「東洋」に対する二重の意識である。「東洋」の一角を占めるなかに我が「日本」があるとして、他の「東洋」諸地域に対する共感の念を示しつつ、同時に諸地域を冷徹に「文化程度」という「西洋」的尺度で一律に評価している主体があり、実はそれが、「東洋」の外側に身をおいた「日本」でもある。「日本」自身は当然のことながら評価対象から外されており、そこからは、「西洋」を体現した「東洋」としての「日本」、という暗黙の自負も窺えるほどである。もともと、その一方で、「中国」の長い文学・文化伝統への自然な尊重がにじみ、新中国の活気ある発展への憧憬とでもいふべき思いも吐露されているのはまことに興味深い。

「日本」から放たれた光は、「西洋」に当てられ、その反照のなかに「東洋」が浮かぶ。実はそのとき、光源である「日本」も、暗闇の中ながら在り処が確定されてくる。「東洋」における古い伝統文化に対する客観的で学術的な態度と、二〇世紀前半の文学革命後、そして新中国成立後の状況に対する主観的で情緒的な態度は、「西欧」における「東洋学」の伝統の移入と、深く長い日中関係を相対化しようとする大人たちの意識の分裂状態がそのまま、少年少女向け文学の翻訳作品群に反映した証と考えてよいのではないか。そこから見えてくるのは、一九五〇年代から六〇年代初頭にかけての、「日本」の自己イメージの一つのすがたである。

こうした結像は同時期にほかでも見られるのか、あるいはその後どのように推移していくのか。本稿でも若干言及した、この後に刊行される小学館の各叢書における「西洋」と「東洋」について、あるいは「地域割り」の方針を採用していない同時期の偕成社や小学館の他の叢書などの場合へと、今後、検討対象を移しながら、翻訳叢書と「教養」形成の問題を追究し続けていくことにしたい。

※ 本稿は、平成二三年度科学研究費補助金基盤研究(C)「戦後の少年少女向け翻訳叢書にみる「西洋」と「東洋」——教養形成の追究」の研究成果の一部をまとめたものである。

※ 本稿の骨子は、東京都立大学で開催された日本児童文学学会第五〇回研究大会で平成二三年一〇月二二日(土)に発表した。

資料1

「世界少年少女文学全集」創元社
Sekai Shonen-Shojo Bungaku Zenshu by Sogen-sha
(World's Boys' and Girls' Literature Series)

part	第一部 The First Series		第二部 The Second Series
	第一期 The First Section 1953.5-1955.4 32 volumes	第二期 The Second Section 1955.5-1956.11 18 volumes	
古代編 Ancient Literature	○		18 volumes
中世編 Medieval Literature	○		
イギリス編 English Literature	1, 2, 3, 4	5, 6	①②
アメリカ編 American Literature	1, 2, 3, 4	5, 6	①②
フランス編 French Literature	1, 2, 3	4, 5	①②
ドイツ編 German Literature	1, 2, 3, 4	5, 6	①②
ロシア編 Russian Literature	1, 2, 3	4	○
北欧編 North European Literature	1, 2		諸国編 Literature of the other countries ①②
南欧編 South European Literature	1, 2		
東洋編 Oriental Literature	1, 2, 3	4, 5	○
日本編 Japanese Literature	1, 2, 3	4, 5	○
世界児童劇集 World's Children's Drama			
世界童謡集 World's Nursery Rhymes			
推理小説集 Mystery Stories			
動物文学集 Animal Literature			
世界探検紀行集 World Expedition/Travel Literature			
世界伝記文学集 World Biographical Literature			
世界名作劇集 World Famous Dramas			
ユーモア文学集 Humorous Novels			
感想日記集 Essays and Diaries			
冒険小説集 Adventure Novels			
世界文学物語 Story of the World Literature			
世界文化史物語 Story of the World Cultural History			

「少年少女世界文学全集」講談社
Shonen-Shojo Sekai Bungaku Zenshu by Kodan-sha
(Boys' and Girls' World's Literature Series)

part	1958.9-1962.10 50 volumes
古代中世編 Ancient & Medieval Literature	1, 2, 3
イギリス編 English Literature	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7
アメリカ編 American Literature	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7
フランス編 French Literature	1, 2, 3, 4, 5
ドイツ編 German Literature	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7
ロシア編 Russian Literature	1, 2, 3, 4, 5
北欧編 North European Literature	1, 2, 3
南欧・東欧編 South & East European Literature	1, 2, 3
東洋編 Oriental Literature	1, 2, 3, 4
日本編 Japanese Literature	1, 2, 3, 4, 5
世界少年少女詩集・世界童謡集 World's Poems for Boys and Girls+ World's Nursery Rhymes	

魏金枝 作
シャオハンとシャオノン
五点
詩
金色のさざえ
よめなの花
電話
空をとほうとしたねこ
人まねインコ
大いばりのねこたち
劇
おおかみと三人のきょうだい、張天翼 作

「少年少女世界文学全集」(講談社)

* 第41巻 東洋編1 1960.11・20
アラビアン・ナイト 大場 正史 訳
王物語
カーン・フィルドーシー作 蕭生 礼一 訳
トルコ民話 竹内 和夫 訳
ラーマヤナ パールミーキ作 田中於菟弥 訳
インド民話 田中於菟弥 訳
カブールからきたくたぐだの売り
ラビンドラナート・タゴール 山室 静 訳

* 第42巻 東洋編2 1961.3・20
西遊記 吳承恩 作 奥野信太郎 訳
中国少数民族民話 松枝 茂夫 訳
蒙古民話 伊藤 貴徳 訳
朝鮮民話 服部 四郎 訳
台湾民話 金 泰雲 訳
東南アジア民話 邱 永漢 訳
南アフリカ民話 矢野龍九郎・松山耕 訳

* 第43巻 東洋編3 1959.8・20
三国志 羅貫中 作 伊藤 貴徳 訳
水滸伝 施耐庵 作 村上 知行 訳
秦の音のちぎり 紀理老人編 伊藤 貴徳 訳
聊齋志異 蒲松齡 作 小田 巖夫 訳

* 第44巻 東洋編4 1962
たからの先生 朱明政・朱明軍 伊藤 貴徳 訳
三人の心 張天翼 倉石武四郎 訳
小つばめの大旅行 秦兆陽 伊藤 貴徳 訳
みみずとみみずのちのちのち 蔵文井 君島 久子 訳
しつぽをふるおおのみ 蔵文井 君島 久子 訳
鳥のことば 米里如 伊藤 貴徳 訳
阿彌と百重島 米里如 伊藤 貴徳 訳
長生塔 巴 金 松枝 茂夫 訳
かめし 葉純鈞 故郷 魯 迅 竹内 好 訳
宮しばい 魯 迅 竹内 好 訳
楚の霸王の自殺 郭沫若 松枝 茂夫 訳
寂寥 謝冰心 倉石武四郎 訳
小さき女へ 謝冰心 倉石武四郎 訳
わかれ 謝冰心 倉石武四郎 訳
松子 (スンツー) 丁 玲 伊藤 貴徳 訳

資料2

「世界少年少女文学全集」(創元社)

* 第25巻 東洋編1 1954.6・15
アイヌ童話集 金田一京助 訳
朝童童話集 野口 麟祐 訳
蒙古童話集 服部 四郎 訳
中国童話集 魚返 善雄 訳
ヒルメ童話集 秋山 修造 訳
台湾童話集 榎本 権郎 訳
フィリピン童話集 榎本 権郎 訳
南洋諸島童話集 松村 武雄 訳
インド童話集 松村 武雄 訳
ペルシア童話集 松村 武雄 訳
トルコ童話集 松村 武雄 訳

* 第26巻 東洋編2 1954.1・1
水滸伝 奥野信太郎 訳
西遊記 魚返 善雄 訳

* 第27巻 東洋編3 1954.12・5
アラビアン・ナイト 佐藤 正彦 訳

* 第42巻 東洋編4 1956.10・5
経野の仙人 奥野信太郎 訳
聊齋志異 蒲松齡 作 柴田 天馬 訳
三国志 奥野信太郎 訳

* 第43巻 東洋編5 1956.7・5
<現代中国童話集>
魯 迅 阿Q正伝 竹内 好 訳
あひるの喜劇 竹内 好 訳
富芝居 竹内 好 訳
巴 金 榎本権郎 訳
古代英雄の石像 新島洋良 訳
長生塔 岡崎俊夫 訳
もの言う木 岡崎俊夫 訳
張天翼 ロー・ウェンイン君の話 伊藤敏一 訳
丁 玲 スンズ 奥野信太郎 訳
秦兆陽 つばめの大旅行 斎藤秋男 訳
蔵文井 みみずとみみずのちのち 斎藤秋男 訳
駱賓基 老女中 飯塚 朗 訳
<朝童童話集>
金瓶天 明かいるい朝 野口麟祐 訳
安藤南 まぼろしの母 野口麟祐 訳
李泰俊 城北だより 野口麟祐 訳

「世界少年少女文学全集」第二部
* 第12巻 東洋編 1957.6・20
<中国新児童文学集>
倉石武四郎 訳

* 小説
消えたかみばん 白川文 作
組員君 康 濯 作
ぼくの妹 任天星 作
海への子ども 蕭 平 作
こおろぎ 任天霖 作
当番 李思新 作
フーちゃんの家さかし 王若望 作

資料3 創元社「世界少年少女文学全集」と講談社の「少年少女世界文学全集」の「東洋編」対照
伝承文学および古典関係

創元社		講談社	
東1 アイヌ童話集	3	金田一京助	
東1 朝鮮童話集	8	野口赫宙	東2 朝鮮民話
東1 蒙古童話集	4	服部四郎	東2 蒙古民話
東1 中国童話集	13	魚返善雄	東2 中国民話
東1 ビルマ童話集	長1+2	秋山修造	
東1 台湾童話集	5	榎本楠郎	東2 台湾民話
東1 フィリピン童話集	4	榎本楠郎	
東1 南洋諸島童話集	11	松村武雄	東1 インド民話
東1 インド童話集	14	松村武雄	
東1 ペルシア童話集	長1	松村武雄	東1 トルコ民話
東1 トルコ童話集	3	松村武雄	東2 中国少数民族民話
			東2 東南アジア民話
			東1 王書物語
			東1 ラーマーヤナ
			東1 カプールからきたくだもの売り(ほか)
東3 アラビアン・ナイト	マルドリュス版	佐藤正彰	東1 アラビアン・ナイト
			東3 水滸伝
			東2 西遊記
東2 水滸伝		奥野信太郎	東3 聊齋志異
東2 西遊記		魚返善雄	東3 三国志
東4 線野の仙人		奥野信太郎	東3 琴の音のちぎり
東4 聊齋志異	8	柴田天馬	
東4 三国志		奥野信太郎	

資料4 創元社「世界少年少女文学全集」と講談社の「少年少女世界文学全集」の「東洋編」対照

創元社 東洋編5 ＜現代中国童話集＞	講談社 東洋編4	参考・岩波書店 岩波少年少女 文学全集
魯迅 阿Q正伝 あひるの喜劇 宮芝居 故郷	≠ 竹内好 竹内好 竹内好	
葉紹鈞 かかし(かかし) 古代英雄の石像	松枝茂夫 1編	
巴金 長生楼 もの言う木	松枝茂夫	
張天翼 ロー・ウエンイン君の話 たからのひょうたん(宝の～) (創元社第二部に劇「おおかみ」と三人のきょうだい)	倉石武四郎	松枝茂夫・君島久子
丁玲 スズ(松子(スズ))	伊藤貴麿	
秦兆陽 つばめの大旅行(小つばめの大飛行)	伊藤貴麿	
巖井文 みみずとみづつばち(～の話) しっぽをふるおおかみ (創元社第二部に童話「大いばりの子ねこたち」)	君島久子 君島久子	
駱賓基 老女中		
朱明政・朱明軍 三人の先生	伊藤貴麿	
米屋如 鳥のことば みみずの歌 阿柳と百霊鳥	伊藤貴麿 伊藤貴麿 伊藤貴麿	
郭沫若 楚の霸王の自殺	松枝茂夫	
謝冰心 寂寞 小さき友へ わかれ 陶奇の夏休み日記	倉石武四郎 倉石武四郎 倉石武四郎	倉石武四郎
金南天 安徳南 李泰俊		
	野口赫宙 野口赫宙 野口赫宙	

第二部東洋編＜中国新児童文学集＞ 倉石武四郎 訳
小説10編、詩2編、童話3編、劇1編
原作は1953—56年発表